

→大海人皇子が、齋王が、そして本居宣長が辿った初瀬街道

2018. 5. 13(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 534 回 参加報告

左手に山裾の森に囲まれた「白鳥神社」が見えてきた。琴引と呼ばれる清流をわたると右手前には周囲 3 m 余にも及ぶ銀杏の大木。晩秋に来るとその見事さに目を見張るであろう。そして奥まったところには、大きな杉林に囲まれた社殿が鎮座されている。祭神は日本武尊で、彼が白鳥になって舞い降りた伝説に因む各地の神社のうちの 1 柱である。



お昼前には、安産寺についた。お堂の一角に「中村集会所」との看板がある。このお寺は住民自治会がお世話している無宗派寺である。それは、このお寺に祀られている子安地蔵菩薩に関する言い伝えで知ることが出来る。(その言い伝えはここでは割愛する)

↑『齋王の道』(向陽書房)

地蔵菩薩立像を特別拝観させて頂いた。2 班に分かれマスクをしてお堂に入ると、その柔なお姿にほっこりさせられたというのが第一印象だ。座高 1 m 8 0 余りのかやの一木作り



で、衣のヒダは室生寺の釈迦如来像の様式と極めて似ている。その上室生寺金堂の右脇の地蔵菩薩像には不似合いな光背が、この安産寺の地蔵菩薩像にぴったり一致することなどから、近世の時代に室生寺から移されたと考えられている。

↑北向地蔵堂にて

前述の言い伝えでは、宇陀川を流れて来られたとのことだが史実は、興福寺との争いに敗れた室生寺が地蔵菩薩さまを逃したとのことであるらしい。

案内くださる方の「電燈ではなく、足元からお灯明に照らされていた時代の人達は、きっと違った印象を抱いて拝んでおられましたと想像しています」との解説に「それでは電気を切ってくださいませんか」と申し入れると、「それでは…天井の灯りを切ります」となった。すると、脚の辺りの小さな電燈の灯りの中に御立ちになる菩薩の姿は、一変した。目の辺りは窪みに代わり、修業の最中の厳しい様相になっていたのだ。

案内くださる方の「電燈ではなく、足元か

安産寺で昼食をとり、田中先生のお話、拝観などの 1 時間余りのうちに、雨は本降りになっていた。最後のお参り先の海神社に向かう道の途中の宇陀川はかなりの流れになっていた。その流れを見ていると大雨が降り水かさが増せば、あの地蔵菩薩がいかだに乗って、この地にまでこられたことが、真実に思えてきたのであるから、雨の日ここにきたのは幸運

だったかもしれない。

この初瀬街道は、宣長の遙か以前に壬申の乱の大海人皇子が美濃国に向かった、あるいは聖武天皇の伊勢御幸の、また斎王群行が通った道である。大雨注意報も出されていた一日だったが、味わい深い歴史散歩の日となった。

帰りの電車で揺られながら思うことは、このような歴史の折り重なった街道を今まで、特急や急行で通過するばかりしていたなあ……である。

<報告：石元英雄>